

警察署、12日再び平戸、13日佐世保及び交番の視察といった具合である。大変な強行軍である。しかも彼は日本食が駄目であった。それでパンを長崎から送って貰っていたが、大抵カビが生えたり、腐ったりしていた。その場合は非常食を食べていた。阿蘇山を眼前にしながらか宮地では缶詰のザウアークラウトとソーセージを食べたという。(J.Kreiner ; Deutsche Spaziergänge in Tokyo)

ヘーンは1891年(明治24)3月6日、日本を去った。

帰国に際して彼の嘗ての教え子達400人は、感謝のしるしに兜、刀、将軍の用いる扇子を贈った。ヘーンは返礼として、それぞれ写真一枚とドイツ語による感謝状を贈った。

ヘーンは帰国してベルリンにおいて地区警察大尉として短期間務めたが、その間司法次官の清浦奎吾が欧州視察旅行し、目指すドイツを訪れた時、その世話をした。前年帰国したばかりのヘーンがいたことは清浦にとって好都合だった。というのは、単に旧交があったというだけでなく、日本に於いて警察制度改革事業を共にし、苦労を共にしていた間柄であったからである。ヘーンは清浦が何を知らたがっているかがよく理解できたからである。清浦は当時のことを次のように回想している。「日本に嘗て4年も雇はれて居たハウプトマン・ヘーン氏が、丁度私が洋行する前年の秋に帰国して居られたので、大に歓迎され、警察、監獄、自治体のことを調査する上に、種々奔走して呉れた。」(『伯爵清浦奎吾伝』上巻)だが、ヘーンは肝臓の手術を受けた後、1892年(明治25)12月30日死去した。彼の死去のニュースは日本では大きな悲しみを以て受け止められた。直ちに記念碑建設の準備が始まった。1894年(明治27)11月ヘーンの教え子と上官たちの寄付金によって三囲神社の境内に高さ3メートル、幅1~3メートルの石碑が建てられ、その碑文は故人と最も関係の深かった清浦奎吾の撰になるものだった。そして篆額はヘーンと雇用契約を締結した一方の相手であった山縣有朋の手になるものだった。この記念碑が建てられた以来、今日に至るまでヘーンは「日本の警察官の父」と称せられ、人々に記憶されるようになった。

清浦圭吾は後年1924年(大正13)に内閣総理大臣にまでなったが、彼の生涯で最も生彩があり、意義深かった時期は、ヘーンと相携え警察官の養成と警察事務の近代化のために全力を傾注した警保局長時代及びそれに続く司法次官時代であったと言って良いと思う。

エルンスト・フォン・シュタインの来熊

伊藤博文は1882年(明治15)憲法取調べのために渡独し、最初ベルリン大学教授の公法学者グナイストから憲法制度に関する講説を受けた。次いでウィーンに赴き碩学ローレンツ・フォン・シュタイン(Lorenz von Stein, 1815-1890)に師事した。シュタインは連日にわたり一般国家組織の根本義より、英仏独三国の政体の異同に至るまで蘊蓄を傾けて講説した。それに感銘を覚えた伊藤は、シュタインを日本へ招待しようとした。しかしシュタインは健康上の理由から断った。その代わりに息子のエルンスト・フォン・シュタイン(1857-1929)が来日した。当時29歳であった。

エルンスト・フォン・シュタインは国内法のドクトルであったが、オーストリア鉄道に従事し、鉄道工事に関する雑誌を発行するなど鉄道事業にも精通した人物であった。明治20年末に来日し国内法をテーマにさまざまな講演と講義を行った。また各地の鉄道事業を視察していた。同21年になって帰国の途次九州鉄道の工事を視察しようと5月4日に東京を發った。当時九州鉄道はドイツ人鉄道技師ルムシュッテルの指導の下に鉄道を建設中であった。さて明治21年5月23日付『紫溟新報』（熊本）は「スタイン氏の来熊」と題して、次のような書き出しでかなり詳しく報じている。

「兼て噂ありし如く奥國の碩儒スタインの息ドクトル・エルンスト・スタイン氏は愈々昨廿二日福岡県福島駅より当地へ向け出發山鹿昼飯温泉場一覽の上同地名産田扇六本を求め其後漸く同午後五時三十分ごろ着熊船場町針屋に投宿されたり右に付き兵事課長吉田較一氏は出迎のため昨日より山鹿まで出張し又今回通弁を依頼されたる済々饗教師山縣良藏氏も同じく山鹿まで赴かれ本日一同車を連ねて帰熊したり。」

通訳を依頼された山縣良藏（山口県人）は、明治18年に済々饗に独逸学科が開設された際に佐々友房が東京から招聘したドイツ学者である。熊本における最初の独語教師といつてよい。

熊本に着くとシュタインは吉田課長、山縣と共に熊本市街を見て歩き、唐人町の競売場や熊本商会を訪れ反物と高田焼を買い求めた。その後富岡知事を訪問し茶菓にてしばらく談話を交わし帰宿した。なお、シュタインは来熊の途中、田原坂に立ち寄り西南の役の実況を詳しく同伴の人に尋ね、当時激戦に用いた砲弾2個を求めたい。翌24日付『紫溟新報』によると、前日の5月23日にはシュタインは吉田較一、津田静一、山縣良藏ほか数人と朝早くから水前寺公園へ出かけ園内の景色を觀賞した。そして富士を形どった芝山に登り、同行の人から、明治10年の役の時、官軍は大砲をこの上に据えて賊兵を射撃した話などを聞いた。そこからの帰途済々饗に立ち寄り独逸語の授業を見たが、そこでは生徒の教科書を取って1ページほど朗読し、懇ろに音読の方法を教示した。次に講武所へ行き撃剣と柔術を見た。撃剣は以前見たことがあったが、柔術はこの日が初めてだったので、とても喜んだ。それより富岡知事宅に至り饗を受けた。それが済むと鎮台へ行き熊本城内を一覽し、転じて本妙寺に参詣し寺内の宝物と加藤清正の遺物などを寺僧に乞うて熟覽したが、シュタインは加藤公の兜に血痕を認め同行の津田に向かって質問した。

シュタインは奥國の法学博士にして且つ好んで歴史を研究する人と見え、津田の説明にじつと耳を傾けた。そしていちいち手帳に筆記した。なおも質問したい様子で暫時低回し立ち去り難いものがあった。同寺に1円を寄付し漸く車を還して夕刻の偕行社において鎮台の饗応を受けた。ところで、この日シュタインは当地の某氏と対話した際、我が国の国情について次のように語った。

「各国が対峙している間によく国の独立を保つには努めて自国の美点を守って、これを發達させなければならない。外国の事物で自国の国情に反しないものは広くこれを採用して国の發展の資料にすべきであるが、国情を破ってまで一切万事外国に合わせるようでは国は保てない。まして日本のように元来良き風俗習慣が多く残っている国において、これを顧みず何もかも外国の事物を取り入れるのは良策ではない。」

翌5月24日シュタインは朝8時熊本を發ち三角へ向かった。吉田兵事課長、津田静一、それ

に県庁の2人の常置委員も同行した。また持永飽託郡長と田口文書課長は先発して同地に至り一行を港頭の浦島屋で待ち合わせた。暫時休憩して一同港頭を巡視したが、田口文書課長は停車場の設置場所や棧橋のことについてシュタインに質問し、シュタインは詳細に答えた。

その後で、小林宇土郡警察署長の案内で水上警察用のボートに乗り港内を縦横に漕ぎまわった。それからまた上陸、その晩は三角に一泊した。翌25日午前8時シュタインは長崎より同伴した吉瀬愉逸と共に前夜入港した汽船に乗り込んだ。一同もみな小船に乗って港口まで見送り名残を惜しんだ。吉瀬愉逸という人は長崎県の外事課員で英仏語をよくし、いつも外国人が来朝し長崎に上陸する時は、県庁より派遣されて接待の任に当たっていた。今回も彼は特に長崎県庁の命を受けシュタインと同伴して佐賀を経て熊本まで来て、また長崎まで伴い帰ったのである。この度のシュタインの来熊については、吉田兵事課長が万事熱心に世話をしたのでシュタインは課長の厚意に大変感謝したという。

以上、主として『紫溟新報』の記事によって述べたが、このようにシュタインの滞熊中のことを具に報じている。いずれにせよ、彼は熊本で丁重にもてなされ世話を受けている。その理由としてエルンスト・シュタインが日本でも有名な碩学ローレンツ・フォン・シュタインの子息であったこと、しかも彼は法律のみならず鉄道事業などの専門知識を持っていたこと、そして明治20年頃の熊本ではまだ西洋人は非常に珍しかったことが挙げられる。

石橋忍月のドイツ語修業とレッシング論



石橋忍月

明治20年代の初めに、森鷗外と共にドイツ派の文芸評論家として盛んに活躍したことで知られる石橋忍月（本名・石橋友吉、1865-1926）であるが、その活動の根拠となったドイツ語の習得過程については従来余り知られていなかった。最近、八木書店から刊行された『石橋忍月全集』（全四巻）の補巻には忍月の詳細な年譜（千葉眞郎作成）が収められている。それによると忍月は明治13年（1880）、数え歳16の時、郷里の福岡を去り上京し、本郷区台町（現・文京区5丁目）の私立独逸学校に入学している。この独逸学校は明治11年に東大医学部予科の独語教員であった山村一藏によって設立されたものである。当時東大医学部入学のための予備校的性格の強かったドイツ語学校で、医学志望者を中心として多くの生徒を集めていた。従って該校に入学したということは

は、忍月は当初、将来は医者になるつもりでいたと見てよいであろう。彼の福岡県八女の実家は代々医者であり、また養子先も医者であったことを思い合わせると、そう考えて間違いのないであろう。だが直には、彼は東大医学部予科には進まなかった。彼は独逸学校に学んだ後、今度は東京外国語学校独語科に進学している。本格的にドイツ語を学ぶためだったと思われる。明治10年代のドイツ語教育で最も重要な役割を担ったのが東大医学部予科とこの東京外国語学